

のびやか



68号

なのはな棟 外あそびや野菜作り 楽しんでいきます！！

センター外療育でレゴランドに出かけました。園内のレストランで昼食を摂ったり、3D眼鏡をかけて4Dシアター鑑賞をしたり、アトラクションを楽しんだり、子どもたちはそれぞれ思い思いに楽しむことができました！

放課後や週末には中庭で元気よく外遊びをしています。天気が良く、風が気持ちよい日はみんなでわいわいとにぎやかにおやつを外で食べることもあります！

5月にトマト・きゅうり、にんじんの苗を植えました。苗の背丈が伸び、葉が増え、実が色づき…どんどん大きくなっていく野菜に水をあげるのが楽しくて、子どもたちの毎日の日課となっています！



目次：

シリーズ 「青い鳥の発達外来と 発達支援」その4	2~3
障害があってもなくても その子らしく育つために	4~5
本の紹介・研修のご案内	6
入所部門の取り組み紹介	7
掲示板	8



シリーズ ～ 青い鳥の発達外来と発達支援 ～ その4

「児童発達支援センターどんぐり園について」

児童発達支援課 河内 章美

当センターのどんぐり園は、平成12年に肢体不自由児通園施設としてはじまりました。

平成24年の児童福祉法の改正に伴い、どんぐり園は、医療型児童発達支援センターとして歩みをはじめました。対象は概ね2歳から就学前のお子さんです。肢体不自由児が多く通園する時代を経て、現在は重症心身障害児が多く通園しており、近年は様々な医療的ケア（気管切開・酸素や呼吸器を使用など）を必要とするお子さんにも多く通園していただいています。平成30年度は22名でのスタートとなりました。

どんぐり園の目的の一つ目は、医療・リハビリテーション・保育・日常生活指導など総合的な療育を行い、子どもの全面的な発達を促すこと、二つ目は、保護者が療育に参加することにより、より良い親子関係を築き、次のステップに進む基礎作りをすることです。

どんぐり園の職員は、どんな障がいを持ったお子さんでも必ず育つ力を持っているとい

うこと、子どもの気持ちに寄り添い、生きる力を育てることを大切に療育を行っています。それでは、どんぐり園の様子について紹介します。まず初めに、クラスやねらい等を下記の表にまとめてみました。

玄関を入り、向かって左手にある大きなエレベーターで2階にあがると、どんぐり園があります。9時45分頃から登園がはじまります。お母さんやお父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、職員と一緒にシール貼りを行うところから療育がはじまります。

10時15分から子どもたちが大好きな「はとぼっぼ体操」の曲が流れると、自然に身体を動かし笑顔を見せる在園児さん、「ここはどんぐりだったかな？」と不思議そうな表情をしながらも体操に参加する新入園児さん。



クラス	つくし（未満児）	たけのこ（年少児）	そらまめ（年中・年長児）
対象年齢	概ね2歳～	3歳	4歳～6歳
定員数	20名		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・どんぐり園に慣れる。 ・生活リズムを整えながらあそびを楽しむ。 ・親子で一緒にあそぶ中で子どもさんの姿を知る。 ・より良い親子関係を築く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々のペースでじっくりあそびを楽しむ。 ・人と関わる楽しさ、気持ち伝わる嬉しさを知る。 ・親子であそぶ中で、子どもさんの姿を見つめる。 ・より良い親子関係を築く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校入学を視野に入れ、集団・社会を意識しながらあそぶ。 ・親子であそぶ中で、子どもさんの姿を捉える。 ・より良い親子関係を築く。
登園日	週3日間の中で選択	週5日間の中で選択	

4月は、新しいお友だちが園に慣れることや在園児さんとの交流を大切にしているため、全体で療育を行っています。クラス別の活動は、5月の連休明けから始まります。

乳幼児期は、人間形成においてとても重要な時期です。子どもたちの将来を見据え、それぞれの子どもの個性に応じた関わりを大切にしています。同じ場所に登園し同じクラスのお友だちと同じ活動を繰り返し行うことで、子どもたちは、一つ一つ分かることを増やしていきます。同じ環境での積み重ねは、子どもたちの楽しいこと、嫌いなことを見つけることへも繋がります。



右
つくしおじさん
中央
まめをくん
左
おたけさん

ここでどんぐり園の子どもたちが大好きなまめをくん、おたけさん、つくしおじさんを紹介します。右側写真の中央がそらまめクラスのまめをくんです。左側がたけのこクラスのおたけさん。右側が、つくしクラスのとつくしおじさんです。各クラスのおはじまりで、まめをくん、おたけさん、つくしおじさんの登場に子どもたちは、笑顔をたくさん見せてくれます。

次にどんぐり園の行事についてふれていきたいと思えます。通常の療育とともにいろいろな行事を行っています。春のピクニックは、毎年恒例となっている庄内緑地公園へ徒歩で出掛けかけます。木陰で行う歌あそびや戸外で食べるお弁当に、子どもたちのキラキラした笑顔がありました。家族参観は、毎回50名以上の参加があり、多くのご家族の方と一緒にあそびを楽しんでいます。青い鳥夏まつりでは、どんぐりブースとして、さまざまなゲームを企画します。療育の中で準備をし、おまつり当日は、親子が主体となってブースを盛りあげてくれました。今年の「どんぐり引き」は、好きな紐を引いて楽しむという簡単なあそびでしたが、紐を引く感覚を楽しむ様

子や、紐の先についている景品を見て喜ぶお客さんに子どもたちも大喜び。遠足は、公共交通機関を利用し、名古屋港水族館やリニア鉄道館などへ出掛けました。いろいろな行事を通し、通常療育では体験できない感覚や感情を大切にしています。卒園式は、どんぐり園での積み重ねを振り返り次の段階へ向かうスタート地点でもあります。あわせて「保護者にとってもどんぐり園での時間は貴重だった」「親子で通うことは決して楽ではなかったが、通ったから得るものも大きかった」と、話してくださる保護者の方の姿がありました。

どんぐり園の行事

4月	入園式
5月	春のピクニック
6月	家族参観
8月	青い鳥夏まつり
10月	遠足
12月	家族参観
3月	卒園式

最後に卒園を目前に控えた年長児の母親グループでの語りについて紹介したいと思います。「どんぐり園を紹介され、母子通園には通いたくないなという思いが強かった」と入園前の母の気持ちを振り返ってくれたお母さんは「たくさん通ったからこそ気づけたことがあった」と語ってくれました。

どんぐり園は「障がい児を持つ母親の気持ちを共感してくれる場」「いろいろなことを教えて貰えた場」「子どもの気持ちを感じとることができる場」「子どもだけではなく親の居場所でもあった」と。

どんぐり園について簡単に紹介させていただきました。「どんぐり園についてももう少し知りたい」「一度見学をしてみたい」と思われた方は児童発達支援課までお電話をお願い致します。

お待ちしております。

電話
052-501-4079



障害があってもなくても その子らしく育つために

Vol. 1

児童発達支援課 地域療育相談員 大橋 加代子

のびやかな原稿依頼があってから、ずっと何を書こうか決まらないまま時間が過ぎた。

ノーマライゼーションと唱えられた時代を経て障害児者に対する理解は大きく変わった。発達障害に関しては書籍やネットニュース、TVなどのメディアが頻繁に障害の理解と対応について伝えている。私自身も研修会で度々話してきた。あえてここで基本的なことを伝えなくても、知りたいと思う人が容易に自分で知識を得られる時代でもある。そうした思いをめぐらせ、何が書けるのかと自問自答を繰り返してたどり着いたところは、稚拙ながらも、長年、障害のある子とその家族にかかわる仕事をしてきた体験とその時代が果たした役割について（ここでは自閉症周辺の子どもたちについて）記し、これから先に進む方々の参考になればいいのではないかとこのころに落ち着いた。子どもが子どもの時代を失わず、その子らしく育つことを願いつつ、何故この仕事をしてきたのかと問いかけながら、とりあえず障害がある子どもたちに思いを巡らせ書きすすめていくことにする。

私にはダウン症の従妹がいる。昭和30年代の後半、小学校入学の頃に従妹は生まれた。まだ障害を隠す時代で多くの方は障害名すら知らない時代である。その可愛いらしさに、抱いてみたいと初めて赤ちゃんを抱かせてもらった。うれしさと得意気な感情が混ざり合い、ご満悦な気持ちで抱いていた。しかし次の瞬間に、その従妹は私の腕の中からスルリと地面に落ちたのである。子どもながらに大変なことになったと思ったことを記憶している。どれくらいの時が過ぎたのか、ある日、「落としたからじゃないか」と母が伯母に話しているのを聞いてしまった。従妹にダウン症という障害があるとわかったときのエピソードである。当然、原因は別にあることは後にわかることにはなるのだが、7歳の子どもにとってショッキングな出来事であったことは確かである。このことと従妹との微笑ましい交流



の中で「障害のある子のことをしていこう」と早くから思うようになり、それはずっと今まで持ち続けている。ちなみに、従妹は家族の大きな愛に包まれて、重い障害がありながらも優しく穏やかな人になったことも書き添えておこう。

昭和54年愛知県心身障害者コロニーに新規採用され、自閉症児の身辺自立や治療を中心とする中央病院児童精神科病棟に配属となった。仕事初日、病棟入り口の施錠を開けながら、後ずさりだけはせず中に進もうと深呼吸をした。保育士でありながら精神科病棟に配属されたこと、そして施錠がある病棟という、全く予期していない辞令に戸惑いと不安でいっぱいだった。この時代は支援がはっきりしてない混沌とした時代だった。きっぱりとした態度で関わると応じるが、寄り添おうとすると途端に顔や首に爪を立てられたりした。散歩の日は気持ちが重い。担当児によっては時間に戻ってこられないし、脱いだ靴さえも履かせられないということが多々あった。

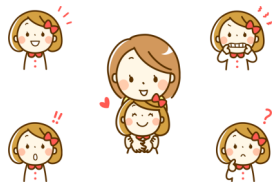


そのたび、先輩職員から指導の助言を受けた。指示の入れ方やこちら側の態度が支援の中心で、子どもにとってどうなのかという観点はあまりない時代であった。感覚過敏や自傷を繰り返す重症な子どもたちもいて、障害児保育に対する気概は消沈し、只々、自閉症の子の関わりは大変だった。理解のない対応からくる二次障害だとも知らずに、生活の自立に向けた援助をしていたのである。入院によって生活改善して自宅に戻っても、また再入院することもまれではなかった。そのたび母親の関わり方に問題があると解釈することもあった。行動療法においては、よい行動には褒美を与え、悪い行動には罰を与えるというもので、ひどく受け入れがたい思いで「子どもの行動のもとにある問題は個々違うのに、同じ対処をする意味を教えてください」と意見を述べたことがある。

この時代、それ以前からの母原病、入力障害、行動療法、その他様々な影響が残っていた。少なからぬ母親はわが子を理解できず育てる喜びを喪失した。また、子どもはそうした母子関係の崩壊の中で、訴える言語を持たず、人に対する不信感を募らせていたのである。

児童精神科の医師らは、この時代にあっても、病棟に入るやいなや、白衣の胸からボールペンを取り出して子どもの腕に電車や時計を描いてやっていた。関わりが持てない子どもが、「あー」と声を出しながら医師に自分の腕を差し出す姿を見たとき、子どもから大人に寄っていくこともあるんだ…と不思議に思ったことを覚えている。診療の空き時間に子どもと散歩しながら、子どもがしゃがみ込めば同じようにしゃがみ込み、石をさわれば一緒に石をさわることをして、言語を持たない子どもとの接点を探していた医師もいた。40年も前の専門機関である医療の中の一風景である。

子どもの視線の先にあるものを大人が見つめ子どもを理解し思いを共有しよう。子どもの関心に添って関わりながら、「もっと」という気持ちを育みつつ、喜びを中心とした人との関係を支援しよう。こうした、今では当たり前前になっている支援を、この時、模索していた専門家らがいたのである。この時代があったからこそ、今の支援が子どもたちにとって大きな意味があることを改めて実感するところがある。



愛知県は国の施策に基づき昭和50年から平成7年まで心身障害児巡回療育指導事業（以下、巡回とする）を実施した。専門的支援や措置の時代から、障害児者が地域の中で支援を受けられることを目指すという大きな方向転換の時期であった。中央児童相談所が知的障害児は愛知県コロニーの医師らと、重心・肢体不自由児は旧第1第2愛知県青い鳥学園*とチームを組んで、研修会や地域に出かけて家族や支援者の相談にのる事業を展開していた。以降、自閉症児の支援はどんどん変わり、早期発見・早期療育、また早期から相談

を受ける中で療育グループや親子通園施設ができていき、支援も発達障害に対する支援へと広がっていった。こうした過渡期を経験したのち平成4年に私はコロニーを退職した。その後、縁あって地域の親子通園の立ち上げの仕事をする事になり、子どもが育つ生活の場における支援が果たす役割に気づく経験をする事となるのである。

（次号につづく）

*旧 第1第2 愛知県青い鳥学園

第一青い鳥学園

現在) 愛知県青い鳥医療療育センター

第二青い鳥学園

現在) 愛知県三河青い鳥

医療療育センター



読書コーナー

「ばーちゃんが ゴリラになっちゃった」

青山 ゆずこ 著



5月初旬、小さい頃からたくさんお世話になった伯父が亡くなりました。

毎年やり取りしていた年賀状が届かず、心配していたときに叔父から伯父が認知症となり、施設に入所をしたことを聞きました。すぐに会いに行こうと考えたのですが「行ってもわからないかもしれないなあ」という叔父の言葉がどこかでひかかり、面会に行くタイミングを逃していました。そんななかで突然の訃報のお知らせがありました。「すぐに面会に行けばよかった」と後悔の念にかられていたときにこの本に出会いました。

おじいちゃんおばあちゃんが大好きだった作者は、祖父母の家で一緒に暮らすことが子ども時代からの夢でした。しかし認知症となった祖母は「誰だあんたは出ていってくれ!」と彼女を追い出そうとし、寝ていると夜中に布団を剥ぎ取って捨てに来たり、部屋中に生ゴミを撒き散らしたりと、かつての優しくった面影はなくなり、祖父は何が起きていても無関心。そんな過酷で大変な状況の中で自分にできることを考えながら、介護に励む姿が描かれたエッセイ。

家族が役割分担をしながら助け合ったり、バラバラになりかけたり…そんな中で作者が見出した答えは・・・。大変な状況もユーモアを交えて描かれているので読みやすい本です。

(児童発達支援課 坂井)

☆ 地域療育担当からのお知らせ

当センターでは、海部・尾張中部障害保健福祉圏域で障害児(者)の療育等に携わっている職員を対象に地域療育研修会を実施しています。昨年度は延べ400名を超えるたくさんの方にご参加をいただきました。

- 第1回 7月31日(火) 講師：センター長・作業療法士
- 第2回 8月28日(火) 講師：地域療育支援部長・地域療育相談員
- 第3回 10月23日(火) 講師：理学療法士・認定重症心身障害看護師
- 第4回 12月11日(火) 講師：地域療育相談員・言語聴覚士
- 第5回 2月 1日(金) 発達支援に中心的に関わる職員向けの研修

内容は別途ご案内させていただきます。各日程の研修の開始時間は14時です。

その他、11月～1月にかけて、親子通園の先生を対象とした「ソング・トピック」の連続研修も予定しています。ぜひご参加ください。



療養介護・医療型障害児入所施設

各棟の取り組みの紹介 ③

♪療養介護 たんぽぽ西棟 ～地域での活動～



当センターにはひまわり棟（東・西）、たんぽぽ棟（東・西）、なのはな棟の5つの生活棟があります。今号はたんぽぽ西棟の取り組み紹介です。

たんぽぽ西棟では、現在30名の利用者さんが生活しています。

地域での活動として、センター外療育、カフェ外出、近隣商店での買い物、初詣、写真館での撮影、美容院でのヘッドスパ利用などを日中活動に取り入れています。

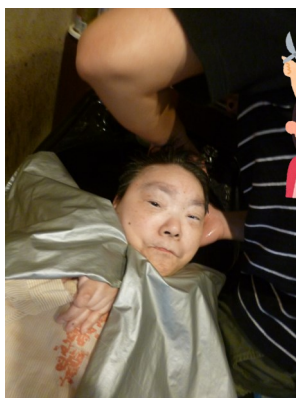
新しい取り組みとして、センターから徒歩5分程の距離にある美容院「クリサンセマム」でのヘッドスパの利用を行いました。ヘッドスパを体験した利用者さんはとてもリラックスされ、満面の笑みを見せてくれました。美容院のスタッフさんに優しく接して頂き、利用者さんも嬉しそうでした。これからも地域での活動を増やし、地域の方との交流・関わりを持っていきたいと思っています。センターの利用者さんを見かけた際には、ぜひ声をかけてください



地域の神社 初詣
良い一年になりますように☆



まちの写真館 写真チェック
素敵な写真が撮れました！



美容室でのヘッドスパ
☆至福の時間☆



名古屋港水族館！！
大きなシャチのオブジェ



電車に乗ってお出かけ！

